

4 ブプレウラムの栽培法試験

背景と目的

ブプレウラムは添え花またはグリーン素材として通年で需要があるため単価が安定しており、栽培管理も他の花き品目に比べ省力的である点で有望な品目ですが、冷涼な気候を好むため高温期の栽培は難しいです。市内では密植で栽培している事例が多く、低温期の品質は問題ありませんが高温期において品質の低下が見られることが多いため、栽植密度が高温期の品質に及ぼす影響を検討しました。

関係先 旭川青果物生産出荷協議会花卉部会

耕種概要

作型 無加温ビニールハウス栽培
供試品種 グリーンゴールド (ミヨシ)

試験区の設定

ア 密植区 (地域慣行)

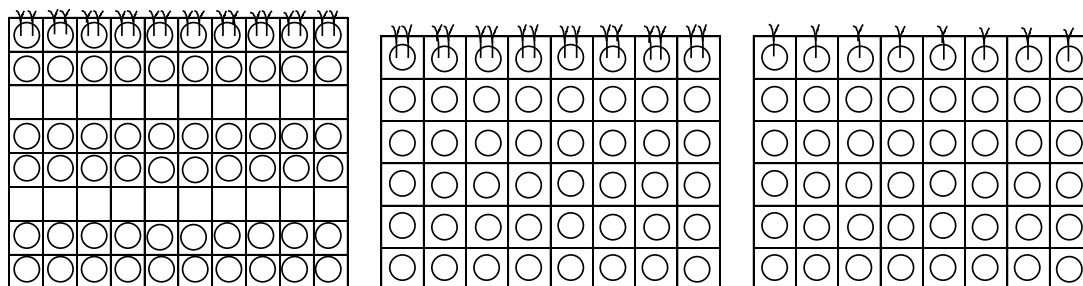
12×12cm のフラワーネットを用い、6 条植え中 2 条抜き、一穴 2 株植え。(6, 410 株/a)

イ 中間区

15×15cm のフラワーネットを用い、6 条植え、1 穴 2 株植え。(5, 128 株/a)

ウ 疎植区

15×15cm のフラワーネットを用い、6 条植え、1 穴 1 株植え。(2, 564 株/a)



ア 密植区 (96cm×120cm)

イ 中間区 (90cm×120cm)

ウ 疎植区 (90cm×120cm)

作型	作期 1	作期 2
播種日	5 月 29 日	6 月 18 日
催芽処理	15℃で 10 日間	15℃で 8 日間
定植日	6 月 27 日 (育苗 29 日間)	7 月 13 日 (育苗 25 日間)
反復数	2 反復	
施肥量	N:P:K=1.2 : 0.4 : 0.5 (kg/a)	
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・育苗は固化培土を使用 (3 粒まき, パーミキュライトで覆土) ・定植から 2~3 週間後に間引きし, 1 穴の目標株数に調整 	

試験結果（作期 1 のみ掲載）

（1）収量調査

規格内本数は密植区が最も多かったです（図）。しかし、中間区は 70cm 以上の切り花の本数が同等で、かつ、80cm 以上の切り花の本数が多かったです。疎植区は、70cm 以上の切り花の本数の割合は高く、80cm 以上の切り花の本数は密植区と同等でしたが、70cm 以上の本数は他試験区の半分強程度しかありませんでした。

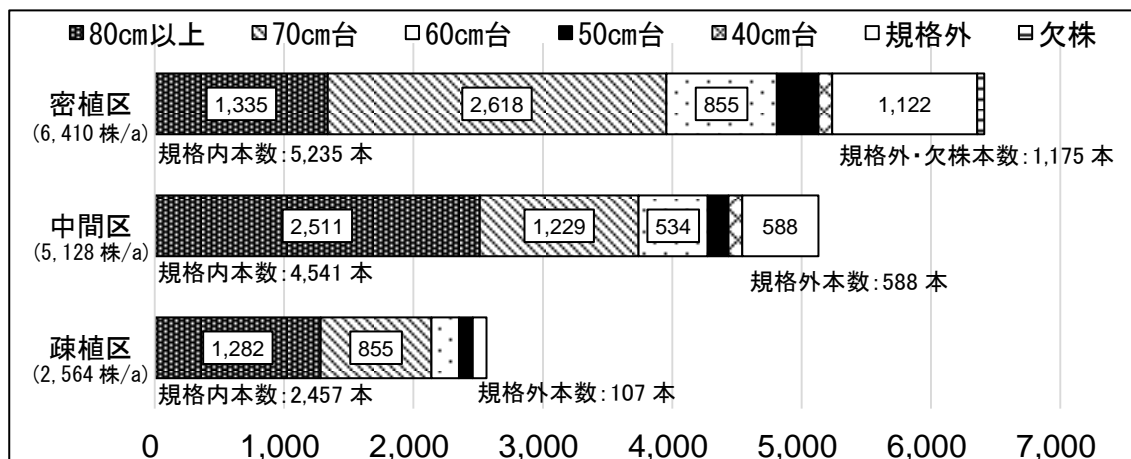


図 1a 当たりの切花長別の規格内本数と規格外本数（本）

（2）特性調査

葉先枯発生率以外の各項目は、いずれも疎植区が最も高く、密植区が最も低かったです（表）。葉先枯発生率は中間区が最も高かったです。

表 特性調査

	切花長 (cm)	切花重 (g)	分枝数 (本)	茎径 (mm)	葉先枯発生率 (%)
密植区	73.2	19.0	6.6	4.4	31.6
中間区	77.3	22.9	7.0	4.8	44.7
疎植区	78.3	35.8	8.0	5.6	37.0

まとめ

上記の結果の傾向は作期 2 もほぼ同じでしたが、葉先枯発生率は傾向が異なり、栽植密度との関係は一定の傾向がでませんでした。また、作期 1、作期 2 ともいずれの試験区でも採花期は変わらない結果になりました。

地域慣行である密植区と中間区を比較すると、70cm 以上の収量は同等であり、品質は中間区の方がやや高かったため、高温期は品質面を考慮すると中間区の密度による栽培が望ましいと思われました。また、中間区の栽植密度にすることにより必要株数の節減や定植時作業量の減少、株間が広くなることによる病害虫の発生リスクの低減などのメリットも考えられました。疎植区は品質が高かったのですが、地域慣行の密植区に比べ収量が約半減したことから、現状では当地で直ちにに取り組む必要はないと考えられました。